

所属・資格 ドイツ文学科・教授

申請者氏名 保阪 靖人

研究課題		話題化に関する統語的研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>topicalization(話題化)の分析を行う。英語では topic の前置、ドイツ語では定動詞第二位 (V2) の原則のために文頭要素をそのまま topic と見なすのが一般的である。イタリア語は英語やドイツ語のような語順に関して厳密な言語ではないが、topic の前置に関しては同一の規則が適用できる。文頭への移動は受動などの形態的な駆動による移動ではなく、機能範疇への移動であると考えられる。Rizzi (2004) などの地図理論(Cartography Theory)によれば、機能範疇は topic, focus, comp, tense などが階層的に構造化されているが、Hosaka(2009)で述べているように、topic/focus などの機能範疇をそのまま CP 指定部と見なせば、シンプルな構造が考えられる。全ての V2 構文が同じステータスを持つのかという問題は地図理論の妥当性を検証する上で再度吟味が必要である。先行研究である Frascarelli & Hinterhölzl (2007) などを踏まえた上で、英語の分析並びに、イタリア語の分析を参考にしながら、ドイツ語の機能構造の階層性について明らかにすることをめざす。</p>
	研究の結果	<p>今年度はドイツ語並びにイタリア語の話題化、中でも特に分裂文 (Spaltsatz; frase scissa) に絞って研究を行った。イタリア語では英語の It is ... that ~. と同じように、補文標識の前に DP が移動すると分析できる。それに対してドイツ語では es (英語の it に該当する)は述語を表す表現であることを示した。つまり、ドイツ語では分裂文に見える構文が、実はそうではなく、述語文と、関係節を組み合わせた構文なのである。この分析は動詞の一致、人称代名詞の束縛などの現象からも支持されうる。研究成果は2019年度にひつじ書房より出版される本に掲載される。この研究と同時に、一昨年より関係代名詞の属格の用法についてのコーパス研究を行っており、属格の関係代名詞は「所有」、「一部」という属性を持つ先行詞と共起しやすいことを明らかにした。</p>
	研究の考察・反省	<p>分裂文は、DP だけでなく、PP、VP、CP などを分裂 (つまり強調) の対象とする。ドイツ語はこのようなタイプの分裂が少ないことも、本研究で得られた成果と一致している。しかしながら、この構文での関係節は一般の定関係節とは異なる派生によって得られと考えられるが、この派生についての理論的な考察にまでは検討が及ばなかった。不定関係節の形成とも関係していると思われるので、不定関係節の形成の分析とともに考察を進めたい。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所		
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>コーパス言語学の学際的研究 (共著) 研究紀要 97号 平成31年2月28日 日本大学文理学部人文科学研究所</p>	